

やましん サロン

SALON

2026. 4. 14

荒れる春彼岸 写真短歌に

■ 山形市 黒沼貞志 79歳

70代最後となる年齢（79歳）を迎えました。それでも十分に生きてきたと思うのですが、世に言う遊行期（75歳以降の25年間）の約5分の1を経過したに過ぎません。いつものケーキとすしを食したつつましい誕生日となりました。当方の誕生日は春彼岸に



当たるため、記憶には「荒れる春彼岸」という言葉がすり込まれています。この記憶に符合するように、今年も前夜から強風を伴った荒れ模様となりました。朝

起きてみたら風は収まっていたものの、庭には雪が少し積もっていました。

ふと、「お前の誕生日（春彼岸）はよく荒れたものだ」と、今は亡き母の口癖を思い出したところで

す。それが当方の記憶「荒れる春彼岸」の元になっているのだらうと思っています。

すぐさま、雪が残った庭をスマホで撮り、その光景に感じた印象と母の口癖を思い浮かべながら短歌を詠みました。そして、いつも

のように写真という画像情報の中に、短歌という文字

情報を組み入れた写真短歌に仕立てた次第です。

この作業により、この日の記憶が目に見える形で表出されます。拙いながら作品となり、外部への発信の素材になっています。

人の記憶は薄れていくものではないでしょうか。日常生活のさまざまな情景を写真や短歌などに表すことは自身の「記憶に触れる」ことにつながります。それらを外部に発信すれば、他者の記憶の喚起にもつながるように思えます。

紙面編集・菊地健介